

マスターコース対象の2、3の講義を聴講させてもらったが、先生の研究論文の分厚いコピーを毎回配り、要点をさらりと説明すること約1時間、あとは論文を読みなさいという具合で、急スピードで先に進む形式が一般的。人気の高い先生は、限られた時間の中で良く工夫した解説に興味を惹く挿話を加え、学生とのコミュニケーションに気を配る。いずれにせよ院生教育は自ら助くる者を助くる主義一辺倒と見えた。この様な教育環境の中で這い上がってくる学生には、自然に研究者としての高い資質が身に付くのであろう。

カナダの大自然と心優しい人々に囲まれて夢の様に滞在期間は過ぎてしまったが、カナダですごした10ヵ月は忘れ得ぬ素晴らしい体験として家族一人一人に刻み込まれた。妻はコミュニティーカレッジやコミュニティーセンターで、子供らも現地校やスポーツクラブで思う存分チャレンジしていた。「パパ、ぼくたちをカナダに連れてきてくれて本当にありがとう」日本への引越の準備中のひととき、長男(10歳)がそう言った。留学は私から家族への最高のプレゼントだったようだ。

6・2 クラスタール大学の周辺

高橋 礼二郎
(東北大学素材工学研究所)



MORITOと命名された木の前で

ドイツにはA、B、C三つの大きな工科大学がある。AはAachen、BはBerlin、CはClausthalである。いずれも長い伝統と歴史を持つ大学で、日本人にもなじみが深い。その一つであるClausthal工科大学エネルギープロセス工学研究所に1991年9月から92年6月までの10ヶ月間、文部省在外研究員として滞在したので、大学の周辺状況をお知らせしよう。

この研究所は私達が通常考えるのとは内容が少し異なる。教授二名がいる、言わば、大講座制の形態をとり、R. Jeschar教授を中心に35名のスタッフが研究と教育に従

事していた。スタッフの半数は給料を得て、5～6年で学位取得を目指す若手研究者(日本の博士課程に相当する)で、彼らが研究の推進者である。もちろん、女性および外国人研究者(中国、トルコ、インドネシアなど)も含まれている。

クラスタールはハノーバーから80km南東、ゲッチンゲンから80km北東の北ドイツのハルツ山中に位置しており、旧東西ドイツの国境に近い町である。正式の名称はClausthal-Zellerfeldで人口18,000人の小さな大学の町であるため、よほど大きな地図でないと見つからない。そこから20km東にある古都ゴスラーがこの地域における政治、経済の中心である。ハルツ周辺はかつてはドイツにおける鉱山、製錬の中心地として栄えたが、今は豊かな自然環境を生かした観光および保養の地となっている。

大学の金属学科には東北大学卒の米沢公敏氏(現在、新日鉄)が研究員として在籍していた。ドイツの他の大都市と違って、この町に在住する日本人は少なく、帰国する時点で日本人は彼と私の二家族だけだった。

山登りをする人がよく知っている“ブロッケン現象”のBrocken山(1,142m)がこの一帯の最高峰で、ゲーテの“ハルツへの旅”の舞台でもあり、ホウキに乗って出てくる伝説上の“ハルツの魔女”の住むところでもある。そこは旧東西ドイツの境界にあたり、頂上付近は東ドイツの領内で軍事上の重要な山だったが、統一後は頂上まで観光用の蒸気機関車が通り、多くの人が登山やハイキングを楽しむ場所となった。

私の滞在した時はドイツ統一後間もない時期で、ソ連の崩壊、東欧諸国の体制変化、EC統合などヨーロッパ社会が大きく変動した歴史的な期間であり、西欧の地でそれを実際に見たり、聞いたりできる幸運に恵まれた。日本に関しては、時折ニュースに出てくる程度で、自動車やファミコンが広まっているほど日本のことは知られていない。まして、“過労死”や“カミカゼ旅行ツアー”などは理解の範囲を越えるものらしい。それらについて書く紙面の余白はここにはないので別の機会にしたい。

帰国直前、私が滞在したことの証として、スタッフの協力を得て、TAMAKI、MORITO、MAIKOと名づけた3本の本を研究所の周りに植えてきた。R. Jeschar教授は、次回君がここに来る時、この研究所は美しい森に囲まれているだろう、と言っていた。今、あの木は根づいたのかどうかを案じながら、ぜひそうなっていて欲しいと強く願っている。ちなみに、3本の本の名称は私の愛する子供達の名前である。